

經濟論叢

第七十一卷 第三號

マルクスのJ.S.ミル批判…………… 杉原四郎 (1)

二分法と絶対價格…………… 今川正 (22)

・利潤率低落法則に關する一考察
…………… 中西健一 (48)

[昭和二十八年三月]

京都大學經濟學會

マルクスのJ・S・ミル批判

杉原四郎

近ごろイギリスのマルキストが「マルクス・アゲインスト・ケインズ」という書物を出し、わが國にも紹介・翻譯されたが、これは、「モリソン氏の『社會主義』に對する回答」という副題が示しているように、ケインズの影響が労働黨の一部にも滲透してきていることを特にとりあげて、ケインズ理論が本質的には獨占資本主義段階における新型の資本家的理論であること、したがつて、このような理論をとり入れているモリソン氏などの右翼社會民主主義者たちは労働運動の正しい發展を毒するものであることを、マルクス主義の立場からあきらかにしようとしたものである。ところで、これと同様の問題が、一世紀近い以前に、同じイギリスにおいて、「マルクス・アゲインスト・ミル」というかたちで、マルキストによつて、いなマルクスその人によつて提起されたことがある。すなわち、ケインズの『一般理論』が資本主義の現段階においてもつているのと同様の意義と影響力とを當時の發展段階においてもつていたのがJ・S・ミルの『經濟學原理』であつて、一八三〇年以降新しい段階に入つた資本主義が當面せざるを得なかつた社會問題に對して混迷をつづけていた當時の思想界に正しい展望を與えんという野心的な意圖をもつて二月革命の直前に出版されたこの書物は、七三年にミルが歿するまでに七版を重ね、その間ヨーロッパ

ツパの各國語に翻譯されて國際的な支持を得るとともに、ミルが労働者の後援を得て下院議員に當選する六五年にはその廉價版が出されて一般大衆の間にも大いに普及した。²⁾ 一方六四年の「國際労働者協會」——いわゆる第一インターナショナル——の創立以來中央委員會の一員としてその理論的指導にあたつてきたマルクスは、協會内部で勢力をえようとあらそつてゐる種々の宗派的活動ならびにそれらを基礎づけてゐるブルジョアの乃至小ブルジョアのイデオロギー——その主なものはイギリスの社會改良主義、フランスのブルードン主義、ドイツのラッサール主義などであり更に後になつてバクーニン主義が登場する——とたえず戦わなければならなかつたのであるが、その中でも特にマルクスにとつて重要な意義をもつてゐたのは、イギリスの改良主義的傾向との戦いであつた。ただしマルクスは、當時のイギリスの労働運動が世界の革命的労働運動全体において樞軸的意義をもつものと考えていたのであるが、その運動の指導者たちは同時に中央委員會の主要なメンバーでもあつて、彼等は協會の運動方向にも大きな影響力をもつていたので、第一インターの運動を眞に革命的な方向に導くためには、彼らの社會改良的思想に協會が支配されることが強く排除されなければならなかつたからである。³⁾ ところでミルの思想、とくにその『原理』は、まさにこのようなイギリス労働運動の指導者達に大きな影響力をもつてゐた。「少數の選ばれたる人達によつて行われている社會主義的實驗(たとへば協同組合のことき)の一切をば、無上の欣快と關心をもつて歓迎」するけれども人力を以ては如何ともしがたい自然必然的な生産法則の存在を忘れる空想的革命的社會主義はこれをきびしくいましめるところのミルの思想が、五〇年代におけるイギリス資本主義の世界の工場としてのめざましい發展とともにいわゆる「飢餓の四〇年代」における急進的政治的な傾向から改良的經濟主義的傾向へと變つて行つたイギリス労働運動の指導者——ミルのいわゆる「少數の選ばれたる人々」——によつてむかえ入れられたのは當

然である。このようなミルの影響が六〇年代の半ば頃から特に強くなつた事はさききのべたごとくであるが、國際勞働者協會中央委員會のメンバーであるイギリス勞働者たち——たとえばジョージ・オッジャー——はミルと個人的にも親交があり、ミルは自分の思想に共鳴する彼等の「良識」に期待するところが大きかつた。⁷⁾しかるにこの「良識」こそマルクスが「一般化する精神と革命的情熱」とをもつて代置せんとしたものであるとすれば、そのためには彼等の強力な思想的支柱であるミルの『原理』がマルクスの立場から批判の對象としてとりあげられざるを得ないであらう⁸⁾。共產主義者同盟以來のマルクスの古い友人で國際勞働者協會の總書記としてその創立以來マルクスと協力してきたエンカリウスが、一八六六年から六七年にかけてオッジャー等の編集する雑誌『コウモンウェルス』に書き其後ドイツ語で出版した『ジョン・ステュアート・ミルに對する一勞働者の反駁』は、まさにこのような要請にこたえたものであつて、マルクス自身も『資本論』第一卷出版前後の多忙な時間をさいてこれに協力し、その最終章のごときはマルクスの筆になるとさえいわれているものである。¹⁰⁾以て當時におけるミル批判の彼にとつての重要性をうかがうに足るであらう。

- (1) John Eaton : *Myx against Kejnes. A Reply to Mr. Morrison's "Socialism"*, 1951. 杉本・佐藤譯『反ケインズ論』
- (2) John Stuart Mill : *Principles of Political Economy. With some of their application to social philosophy* 1ed. 1848 ; 2ed. 49 ; 3ed. 52 ; 4ed. 57 ; 5ed. 62 ; 6ed. and *The People's Ed.* 65 ; 7th ed. 71. Stöber & 獨譯は五二年 Dissard et Courcelle-Seneuil の佛譯 (第二版) は六二年、チャルヌイシエフスキの露譯は六五年。以下本書からの引用はアシェン版および田正雄譯による。
- (3) 「資本の首都としての、これにちまで世界市場を支配してきた強國としてのイギリスは、さしあたり勞働者革命にとつてもつとも重要な國であり、そのうえこの革命の物質的條件がある程度まで成熟している唯一の國だ。イギリスの社會革命を

促進することは、それゆゑ、國際労働者協會のもつとも重要な目的である」(マルクスのマイヤー・フォークトへの一八七〇年四月九日付の手紙、大月書店版マルクス・エンゲルス選集第八卷——以下選集⑧と略稱する——五三六頁)。

(4) 國際労働者協會の暫定中央委員會議員の顔ぶれ(選集②二〇—二二頁)を見よ。なおミル・石上良平譯『社會主義論』の譯者解説を参照。

(5) 「革命的創意はフランスからうまれるであろう、ということにはたしかではあるが、重大な經濟革命のための楨柱としてやくだちるのはイギリスだけである……イギリス人たちは、社會革命に必要な物質をすべて具備している。彼らにかけているのは、一般化する精神と革命の情熱とである。それらを補填しうるもの、それゆゑに、眞に革命的な運動を、この國において、したがつてきた方國において促進しうるものは、總務委員會をおいてほかにない」(選集②二四八—一九頁)。

(6) J. S. Mill: *Autobiography*, Columbia University Press, p. 164 西本正美譯二七五頁。

(7) Elliot (ed): *The Letters of John Stuart Mill*, Vol. II, p. 334. なおミル『社會主義論』譯一五一—六頁ならびに譯者解説参照。

(8) 大五年六月二十四日づけのマルクスのエンゲルスへの手紙の一節は當時のマルクスの對ミル意識を示すものとして興味ふかい。「僕は、總務委員會の會議で、『賃金の一般のひき上げ』等がいかに作用するかという、ウェンストン君の提出した問題にかんする講演をした。……『まづこの論文の印刷が希望されている。一方では、それは僕にとつて有益であらう、というのが、彼らに』。の・ミル、ブーズリー教授、ハリソン等々と連絡があるからである……」(Marx=Engels Gesamtausgabe, (XIV GA 2 附註) III, Bd. 3, S. 274, 選集②一〇五一—六頁)。

(9) J. G. Eccarius: *A Workingman's Reputation of J. S. Mill*, *Eines Arbeiters Widerlegung der national-ökonomischen Lehren John Stuart Mills*, 邦譯「労働者のジョン・スチュアート・ミル『經濟原論』反駁」(改訂社版全集第十六卷)。マルクスによれば「彼のミル批判は従来ミルの信奉者であつた彼等(註⑧)に引用した手紙の中にでてくるハリソン等々をさす——引用者)を非常に感嘆させた」(GA, III, Bd. 3, S. 402)。

(10) E. Drämn: *Marx-Bibliographie*, 1920, S. 39.

『資本論』においても全巻を通じてミルへの言及が随所に見られるのであるが、とりわけ六七年に公刊された第一巻でのミル批判は、影響力の大きい『原理』を主としてとりあげてその一般的性格を解明しており、その敘述は断片的ではあるがミルの本質をついて極めて鋭い。すなわち「彼の教科書『經濟學原理』の本文を、彼が當代のアドム・スミスだと名乗り出ているその序文（第一版）と比較して見ると、ひとは、この男の素朴さと、彼を信じきつてアドム・スミスだと買扱つた公衆の素朴さと、そのいづれをより多く驚嘆すべきか途方にくれるのであるが、彼とスミスとの比は、ほぼカルス要塞のウイリアムズ・カルス將軍とウエリントン侯との比のようなものである」と断じてその俗流性を暴露するとともに、¹¹⁾「誤解を避けるために注意しておくが、J・S・ミル等々の如き人々は、彼等の舊經濟學的ドグマと、彼等の近代的傾向との矛盾の故に咎むべきだとしても、彼等を俗流經濟學的辯護論者のお伴たちと混同することは全く不當であろう」と評して、一方ではミルをとらえている「舊經濟學的ドグマ」を一一吟味しながらも他方では良心的な「近代的傾向」が彼に存することを見おとすてはいないのであつて、この点に關して彼は七三年初頭にかいた『資本論』第二版の跋の中でリカード以後のイギリス經濟學的發展過程をのべるにあつてつぎのようにかいてゐる、「大陸における一八四八年の革命はイギリスにも反應があつた。なほ科學的意義を要求せる、そして支配階級の單なる詭辯學者・あやうしや以上のものたらんと欲した人々は、資本の經濟學をば、プロリタリアートの今やもう無視すべからざる諸要求と調和させようと試みた。かくして、ジョン・ステュアート・ミルによつて最もよく代表されているような、生氣のない折衷論が生じた。これは、ロシアの偉大な學者で批評家たるN・チェルヌイシエフスキーがその著作『ミル以後の經濟學の概要』ですでに立派に闡明したやうに、『ブルジョア』經濟學の破産の宣告である¹⁴⁾。見られるとおり、ここにマルクスのミル批判の結論が端的にのべら

れているのであるが、注意すべきことは、ミルの『原理』が四八年の革命に對するイギリス的反應の産物だとされていることであつて、この場合同じ革命的情勢から生れたいわば、ドイツ的反應の産物たる『共產黨宣言』の著者にとつて、『資本論』に結實するみづからの思想体系に對立するところの同時代の最も有力な思想体系の一つとして、『經濟學原理』を中心とするミルのそれが意識されていたのではなからうか。ミルの思想体系の個々の部分に對するマルクスの評價が、たとえば哲學ならばヘーゲルにくらべ、經濟學ならばスミス、リカードにくらべ、社會主義思想ならサン・シモン、フリーエ、オーエン等にくらべていかに低いものであつたとしても、だからといつてミルの思想体系が十九世紀の後半においてもつた客觀的意義の重要性を輕視するならば、われ／＼はマルクスのミル批判の眞意をも見誤ることになるであらう。前世紀なかげの社會問題との對決という共通の問題意識から生じたこの二つの偉大な思想体系の全面的比較檢討という課題に立ちむかうことは本稿のよくするところではもとよりないが、ここではそれへの序論的考察として、さきにも述べたような事情で六十年代に入つて目立つてくるところの「ブルジョア的」「折衷的」社會主義者ミルと「革命的」「科學的」社會主義者マルクスとの對立を念頭におきながら、四、五十年代におけるマルクスのミル批判の基本視點の形成過程をたどることにしよう。ただし、兩者の思想体系は、ともに四十年代においてその基礎を確立し、五十年代以降歴史のうごきとともに成熟發展の途をあゆむものであつて、六十年代以降に表面化するその對立は、このような發展過程の歸結として、社會的背景との關連において把握されなければならないからである。

七三年五月、從來のそれとは質的に異つた世界恐慌の勃發を前にしてミルは死ぬが、たとえその後の近代理論のめざましい發展によつて、ミルの經濟學の個々の分析用具の多くは時代おくれになつてしまつたとしても、その社

會哲學はなお死なず、¹⁷⁾ かえつていまや革命的社會主義に對抗する諸種の「社會主義」——モリソン氏の「社會主義」もおそらくその一種であろう——にとつての有力な一想淵という意味を與えられているとすれば、¹⁸⁾「マルクス・アゲインスト・ミル」という商題も亦若干の現代的意義をもつていゝといわなければならないであろう。

(1) K. Marx : *Das Kapital, besorgt vom Marx-Engels-Lenin-Institut*, Bd. I, S. 130. 長谷部譯・日評版(三六二頁)。

(2) Marx : *ibid.*, S. 642. 邦譯(九八頁)。

(3) ミルがとらわれているプログラムについての『資本論』のミル批判の箇所を列記す(研究所版の頁数のみ示す)れば、貨幣數量説(Bd. I, S. 129 f.)補償説(T. S. 460 f.)收獲遞減の法則(T. S. 532)剩餘價值Ⅱ利潤論(T. S. 541 ff., S. 626)アダム・スミスのヒック(T. S. 619, Bd. II, S. 224, S. 394)。なおミルの名前は直接あげられてはいないがそれに關連の深いものとして勞賃基金説(T. 640 f.)勞賃鐵則説(T. 662 f.)。

(4) Marx : *ibid.*, Bd. I, S. 13. 註(二二六頁)。このようなミルの學史的地位づけに照應して、『剩餘價值學說史』ではミルは「リカード學派の解体」の最後でとりあげられている。

(5) この点については本稿第二節以下を參照。

(6) たゞせばユグーのミル『原理』出版百週年を記念した次の論文を參照。A. C. Pigou : *Mill and the Wage fund*, *Economic Journal*, June, 1949, No. 234.

(7) 河合雅文郎『英國社會主義史研究』第三—四章。杉本榮一『近代經濟學の基本性格』五二—三頁參照。

(8) たゞせば Heiman : *History of Economic Doctrines*, 1945. にあける社會民主主義立場からの、史あるいは Robbins : *The Theory of Economic Policy in English Classical Economy*, 1952. にあける新自由主義的立場からのミル評價を參照。

11

ミルとマルクスの思想体系は、ともに四十年代においてその基礎を確立し、五十年代以降成熟・發展の途をあゆむものであつて、六十年代以降に表面化する兩者の對立は、このような發展過程の歸結として把握されなければならぬことはさきにも述べたごとくであるが、そこで本節ではまづ四十年代におけるマルクスのミル批判の基本視點の形成過程をたどることにしよう。

マルクスより十二才の年長でしかも非常に早熟のミルは、一八二〇年にはやくもベンサムの功利主義者¹⁾哲學的急進派として評論活動をはじめ、二六——二八年のいわゆる「精神的危機」を経て第二期に入つた彼の思想は三〇年代以降いちぢるしく幅と深さを加えるのであつて、三〇年代における多面的精進の成果が四〇年代の三つの著書——『論理學』四三年・『經濟學試論集』四四年および『經濟學原理』四八年——となつて結實する。すなわち、三〇年の七月革命を契機としている／＼なかたちでうちならされた「俗流經濟學の葬鐘²⁾」を、敏感なミルの時代感覺がききのがす筈はなく、一方ではフランスのサン・シモン派の社會思想特にその私有財産論批判に耳を傾けて從來の自由主義的・個人主義的社會思想を再検討すると共に、他方ではカーライルやコールリッジ等を通じてドイツの理想主義的・浪漫主義的乃至は歴史主義的世界觀の影響をうける事によつて從來の功利主義的・自然主義的世界觀に自己反省を加えることになるのであつて、このような「ヨーロッパの思潮、云い換えれば大陸の思潮の影響、殊に十八世紀思潮に對する十九世紀思潮の反動の影響³⁾」をくり抜いた後に生れたのが、イギリス古典學派の傳統的な思考の方法論的「身づくろい」としての『論理學』であり、その基礎の上に『國情論』に代るべき思想体系をうちたてんことを期した『經濟學原理』であつた。これに對してマルクスも亦四〇年代において、一方ではフランス社會主義の痛烈な市民社會批判に刺戟されるとともに、他方ではイギリス古典派經濟學の市民社會分析を

攝取しつゝ、ヘーゲルの辨證法を「労働の自己疎外とその止揚」という方向に深化徹底することによつてドイツ・イデオロギーを清算し、四五年頃には新しい世界觀¹¹辨證法的唯物論および史的唯物論を確立するが、その基礎の上にエンゲルスの協力を得て「今度はあたらしくつかんだ考えかたを種々様々な方面にむかつて各別にしあげる」仕事の一應の總括が四八年の『共産黨宣言』に外ならない。この間にマルクスが讀んだ幾多のイギリス經濟學文献の中には、ミルの父の『經濟學綱要』——その原稿は十三才の少年ミルが父の講義をきいて日々父に提出したりボトをもとにして作られ、一八二二年に出版されるときにもミルは父の命令でその欄外見出しを作つている——や、ミル自身の『經濟學試論集』があるが、この期のマルクスにとつて重要なのはミル個人の思想よりもむしろその基盤たるイギリス經驗論・功利主義・古典經濟學そのものであり、それを止揚しうる思想体系をきたえ上げることであつた。そしてこの思想体系の形成過程を通じて後年のミル批判の基準も亦確立されてゆくのであるが、かかる見地から、それ／＼の意味において三つの思想的源泉をもちながら、一方は『原理』へ他方は『宣言』へと結實してゆく二つの思想を對比するとき、つぎの三点が特に注目し値すると考えられる。

第一にベンサム主義についてマルクスは『神聖家族』や『ドイツ・イデオロギー』の中でつぎのようにのべている。パーコンにはじまりホブズ・ロック等によつて發展せしめられエルヴェシウス・ドルバックによつて文明化されふたゞびその生誕の國イギリスにかえつた唯物論の系譜をうけつぐベンサムは、「エルヴェシウスの道徳説にたつて彼の『だれにも諒解される利害』の体系を建設した」のだが、彼は「イギリス並びにフランス人達に依つて等閑視された經濟的内容をとり入れていつた、……すべての實存的諸關係の功利關係の下への完全なる包攝……をわれ／＼はベンサムにおいて初めて見出すのである。そこにおいては、ブルジョアジーはフランス革命と大工業の發

展後もはや一つの特種階級としてではなく、寧ろその諸條件が全社會の諸條件であるところの階級として現われている」。このようにブルジョア階級が一旦支配階級としての地位を確立してしまふと、功利主義は「漸次に現存物の單なる辨明に、；轉化」することによつて初期の進歩的批判的品格を失つてゆくか、或いはその平等主義的・環境論的主張をブルジョア支配下の社會の實狀に照して徹底せしめてゆくことによつてブルジョアの限界そのものを脱却してゆくことにならざるをえない。マルクスによれば前者の途を歩むものがジェームズ・ミルなどの「新しい經濟學者」であり、後者の方向にすすんだのがロバート・オーエンであつた。功利主義がベンサム的なかたちのまゝでは辯護論的品格に墮することになりながら、又、オーエン的な方向に對しても一應の理解と同情を示しながら、しかも結局は功利主義を、封建体制に對する攻撃の思想的武器から新興勢力に對する防衛の思想的要素に轉化せしめる方向へと修正していつたJ・S・ミルにくらべて、オーエンの方がはるかに高い評價を後年『資本論』において與えられることになる所以である。

第二にマルクスが『經濟學・哲學草稿』で「近世イギリス國民經濟學の巨大な首尾一貫した進歩は、それが——勞働を國民經濟學の唯一の原理へたかめつゝ——同時に勞賃と資本利子との反比例關係をまつたく明瞭に解明し、資本家は原則として勞賃のひきさげによつてのみ逆に利得することができるということを解明したことであつた」とかいてるように、彼にとつての古典學派の意義は、勞働價值説に基づくところの産業資本賃勞働という基本的階級關係の分析であつた。従つてかの人口法則のような超歴史的自然法則をもち出すことによつて階級分析を横にそらし、價值論についても需給説的な現象分析に止まるところのマルサスの立場ははじめから強く斥けられ、¹⁰⁾ ミスの價值論や階級分析を一段と純化したリカードが高く評價されるところに、それをさらに社會主義的方向へ發

展せしめることが志向されるのであり、このような企圖は『哲學の貧困』や『賃労働と資本』において一應達成されていくといつてよいであろう。これに對してミルは父を通じてスミス——リカードの傳統をうけつぎながらも、同時にマルサスの乃至シーニョアの「俗流經濟學」の傾向をも強くうけており、そのあらわれとしての價值論における絶對價值説の放棄¹¹⁾や利潤論における俗流化及び機械論における補償説の採用¹³⁾などはむしろリカードからの後退としてマルクスからの批判をうけるべきものであつた。とりわけミルが全理論体系の支柱として固持するところのマルサスの人口法則は、分配法則の歴史性¹²⁾を認めるミルをして「生産諸關係そのものの同等不變な、人間の自然から生じる・したがつて又あらゆる歴史的發展から獨立する・性格を、それだけですます固執¹⁴⁾」せしめる根本原因として、後年マルクスのミル批判における中心点となるのである。¹⁵⁾

第三に、フランスの社會主義についてマルクスは「水平化された、細分化された、それゆゑに不自由な労働としての労働(を)、私有財産とその人間疎外的な定在の有害性の源泉としてとらえ(る)フリーエ(と)……工業、労働、そのものを本質であると宣言し、ひたすら工業家の單獨的支配と労働者の状態の改善とを熱望する」サン・シモン¹⁶⁾との鋭い資本主義批判から多くのものを學びながらも、「政治的な、とくに革命的な行動をすべて非難する……そして、小さな、當然失敗するような實驗によつて、實例の力によつて、あたらしい社會的な福音に道をきりひらくこうとする」¹⁷⁾その空想的性格をきびしく批判するとともに、「この學派の創始者たち」とその弟子たちの「反動的分派」とを區別し後者はしだいに「保守的社會主義の親類におちい」つてゆくとのべているが、¹⁸⁾ミルが影響をうけたのはこの「反動的分派」の一つであるサン・シモン派であつて、彼はその私有財産制批判に強く共鳴し、かの生産分配差別論の構想もそれに負う所が多いのであり、¹⁹⁾それが主張する遺産相續制の廢止論からも強い影響をうけて

いる。²⁰⁾マルクスはすでに「ドイツ・イデオロギー」の中でサン・シモン派の財産論の不徹底性を指摘しており、また、相續權の問題については、後年第一インターナシヨナルの第四回大會（一八六九年）でそれがとりあげられたとき、「四十年前サン・シモンの弟子たちがおかした大きな誤謬の一つは、彼らが相續權を、こんにちの社會組織の法制的歸結としてではなく經濟的原因とみなした点にあつた」といい、「われわれのたたかうべきものは、原因であつて結果ではなく、經濟的土台であつてその法制的上部構造ではない……われわれの大目的は、若干の人々に、多くの人々の勞働の成果を横領する經濟的權力をその生存中あたえる制度をなくすることにあらねばならぬ」とのべているが²²⁾、かかる考え方はすでに『宣言』において確立したのであつた。またその『宣言』の中で小ブルジョア社會主義の代表者とされているシスモンディについてマルクスが「近代的生産關係における矛盾をきわめてするどく解剖した」点を賞揚しながら「その積極的内容」たるギルド制工業や家父長的農業擁護論をしりぞけているのと正に逆に、ミルは『原理』においてシスモンディの一般的過剰生産論を否定しつつかえつてその自作農讚美に讚意を表しているが、²⁴⁾このようなミルの恐慌論および小規模農業論こそ後年エツカリウス＝マルクスの『原理』批判の中心論点たるべきものであつて、²⁶⁾ここにも亦われは、二つの思想体系の對照的性格を見いだすのである。

(1) Marx: *Das Kapital*, Bd. I, S. 626. 譯(4)六六頁。

(2) Mill: *Autobiography* p. 113. 譯一九六頁。

(3) 出口勇藏『經濟學と歴史意識』勁草書房版 三四九—五二頁參照

(4) 杉原『勞働の自己疎外とその止揚——マルクス『經濟學・哲學草稿』と『資本論』』（關西大學『經濟論集』第一卷第二号）參照。

- (5) エンゲルス「共産主義者同盟の歴史」選集(2)四三六頁。
- (6) 『綱要』についてはフランス譯からの抜萃と評註とをふくむノート(四四年)があり(GA, I. 3. SS. 520—550)、『試論集』は四七年の『哲學の貴冑』(選集(1)三四七頁)に引用されている。
- (7) Marx und Engels: *Die Heilige Familie*, GA, I. Bd. 3. SS. 304—308. 選集補卷(5)三五—五七頁。 Marx und Engels: *Deutsche Ideologie*, GA, I. Bd. 5. SS. 386—389. 唯研譯五五二—五六一頁。
- (8) このようなミルの努力については、辻清明「ジョン・スチュアート・ミル」(『自由主義思想十講』所收を、だが一方オーストリア主義者タムソンとミルとの關係については、高橋誠一郎『古版西洋經濟書解題』五六二—五六六頁參照。
- (9) Marx: *Oekonomisch-philosophische Manuscripte*, GA I. Bd. 3. S. 98. 選集補卷(4)三二〇—三二二頁。
- (10) 『フレンチャと社會改革』にたいする批判的傍註(四四年)におけるマルサス人口論批判を參照。(GA, I. Bd. 3. SS. 11—14. 選集補卷(4)二〇—二六頁)
- (11) ミルの相對價值論とそれが彼の經濟學體系に對してもつ意義とについては、岸本誠二郎『勞働價值論の研究』二二四—二五頁參照。
- (12) ミルの利潤論がもつ監督賃金說的側面については、『剩餘價值學說史』(カウツキー版)第三卷第七章六「監督賃銀」が立ち入った吟味を加えている。尙ミルの利潤論の學史的意義については、M. Dobb: *Political Economy and Capitalism*, p. 187. 岡譯一三七頁參照。
- (13) ミルの機械論をマルクスの視角から學說史的に再吟味したものととして、眞實一男「バートンおよびリカードウの『機械論』について(三)」、「經營と經濟」第三十二年第一册參照。
- (14) Marx: *Das Kapital*: Bd. III, S. 934. 譯田五一七頁。
- (15) エッカーリウス『反駁』の最終章「資金と人口」にいわく「資本經濟の辯護者中で最も偉大な思想家がこの上の人口増加は神聖なる財產關係の存続を脅かすという結論に到達したという事實は、此の關係が既に人間の進歩の障害となつた事を證明している」と(改造社全集(6)一五三頁)。

- (6) Marx : *Oekonomisch-philosophische Manuscripte*, GA I, Bd. 3, S. 111. 選集補卷(4)三三七頁。
- (7) Marx und Engels : *Das Kommunistische Manifest*, Nauka, Tokyo, SS. 41-42. 選集(3)五二七-八頁
- (8) Mill : *Autobiography*, p. 175. 註一八九頁
- (9) Mill : *Principles*, pp. 221-226. 譯(3)三六一-四四頁
- (10) Marx und Engels : *Deutsche Ideologie*, GA I, Bd. 5, S. 211 ; S. 452. 唯研譯一九九頁、六四八頁等參照。
- (11) 選集第十一卷、一二六頁
- (12) Marx und Engels : *Das Kommunistische Manifest*, S. 36. 選集第二卷五一九-五二〇頁。
- (13) Mill : *Principles*, pp. 556-563 ; pp. 302-317. 譯(3)二〇四-三六頁および(2)一七七一-二〇六頁參照。ミルの一般的過剰生産恐慌否定論は、彼の自由競争論美論——それは彼の共產主義批判の最も重要な論点の一つである——に「つらなり、自作農論議論は、その人口制限論と関連をもっている (Principles : p. 289. 譯(2)一五三頁)。
- (14) エッカーリウス『反駁』の三「資本に關する基本的原則」四「供給の過剰」および十二「小規模農業」を、および Marx : *Theorien über den Mehrwert*, herausgegeben von K. Kautsky, Bd. II, 2, S. 276. 改造社全集(10)二九四頁を參照。またミル恐慌論の折衷的・過渡的性格を學史的に説明したものと、谷口吉彦『恐慌理論の研究』第九章參照。

三

このように二つの思想体系の對比を四〇年代において總括的に表現するものが四八年の『經濟學原理』と『共產黨宣言』であるとすれば、五〇年代においてそれをしめすものは五九年の『自由論』と『經濟學批判』であろう。ただし多様性に富む人間の諸能力の完全な發展という人生の最高目的の爲にこそ自由がどこまでも尊重さるべきであり、一定の限度内での社會的統制が必要とされるのも亦同様の根據にもとづくものであることを主張して、從來

のパンタムの乃至マンチエスター的自由主義に理想主義的社會改良的色彩を加味した『自由論』が圓熟期のミルの代表作とすれば、かのいわゆる唯物史觀の公式を序論とし勞働の二重性把握を基軸とする商品貨幣分析を本論とする『經濟學批判』もまた圓熟期のマルクスの記念碑的作品たることを失わぬからである。ところでいま四九年にロンドンに亡命してから『批判』を出すまでの十年間におけるマルクスの研究の跡をミル批判の基本視點の深化という觀點からふりかえつて見ると、つぎの三點が特に重要な意義をもつものと思われる。

第一に、ミルは一八五〇年に再開されるマルクスの經濟學研究において批判的檢討の對象となつた多數の經濟學者の中の一人であるが、マルクスのミル經濟學全体に對する評價は、五〇年代の末にはほぼ定まつたと見てよいであらう。ただし『批判』およびその準備のノートからわれわれはミルの經濟學史上での位置づけならびにミル經濟學體系の基本性格に對するマルクスの考え方をよみとることができからである。すなわち『批判』はミルの學說に一顧も與えておらないのであるが、これはマルクスからすれば商品・貨幣分析の基礎理論においてはミルが積極的な何物をももつていないことを示すものであらう。この「有名なイギリスの經濟學者」の學說を『批判』が完全に無視していることは、スミスやリカードなどの古典學派の代表者にくらべると經濟學者としてのミルは所詮亞流的存在にすぎないとするマルクスの評價の消極的表現であり、そのような態度はミルを過大評價している當時の世論とくらべると著しい對照であらう。だがマルクスは『批判』の一般的序説として書かれたノートの中ではミルの『原論』の論理的支柱ともいふべきかの生産分配峻別論をとりあげ、「經濟學者たち……にあつては生産はむしろ分配等とちがつて、歴史から獨立した永遠の自然諸法則の枠にはめこまれたものとして敘述されなければならぬ——たとえミルを見よ——しかもそのさいに、ブルジョアの諸關係が社會一般のくつがえしがたい自然諸法則と

してまつたくこつそりとおしこまれるのである。これがやりかた全体の多かれすくなかれ意識された目的である。その反對に分配では、人間は、じつにありとあらゆるかつて氣まませるされてきたというのである」として、生産と分配とをミルの峻別することが理論的にいかに無理であるか、にもかかわらずあえてそれが主張されるのは如何なる實際的意圖にもとづくのか、ということをおきらかにするとともに、「生産を永遠の眞理として展開し、歴史を分配の領地に封じこめる經濟學者たちの愚劣さ」にくらべると、「近代的生产をその一定の社會的しくみとして把握することを任務としたリカード」の方が、「本能的に」ではあるが生産と分配との關係をヨリ正しく把握していたとのべている。後年マルクスはゴータ綱領におけるラッサールの偏向の一つとして分配を一面的に重視する点を取りあげ、「いわゆる分配を重大視して、それにもつともおもきをおくことは、一般にあやまりであつた……俗流社會主義（およびそれにならつてまた民主主義者の一部）は分配を生産様式から獨立したものとして考察し、かつとりあつかい、したがつて社會主義は主として分配を中心とするものであるように説明することをブルジョア經濟學者からうけついでいる」とのべているが、このように俗流社會主義にも大きな影響をもつていゝるミル的な考え方を徹底的に克服するためには、『批判』の序説ならびに序論に見られるような經濟本質論・經濟學方法論およびそれにもとづく經濟學の体系論が確立されなければならなかつたのである。

第二に五〇年代のマルクスは「商工業の全般的恐慌の結果としておこるのでなければ、戦争も革命も全ヨーロッパをうずまきのなかに引きいれることはできないであろう。そしてその合圖は、ヨーロッパ産業の代表者であるイギリスがあたえるにちがいない」という見通しの下に、革命的實踐運動から身をひいて、經濟學の理論的研究に没頭するとともにイギリス資本主義の現状分析を通じて來るべき恐慌と革命を準備する客觀的・主觀的諸條件の發展

を熱心に探究しており、ブルジョア社會一般の内的構造をきらかにする「生理學」としての經濟理論の抽象的研究も、「現在イギリスを支配している階級の生理學」の具体的探究との關聯においておこなわれたのであつた。われ／＼は、その成果をマルクスが當時「ニューヨーク・トリビューン」や「新オーデル新聞」などに寄稿した時事評論に見ることができ、彼がそこで克明に分析しているイギリスの政治的經濟的情勢こそ、ミルにとつても亦最大の關心事であつて、それに對する深い實踐的關心をもつて『自由論』等が書かれたところの又それに對して大きな反響を與えつつ『原理』が版を重ねて行つたところの現實的地盤だつたのである。したがつて、もし『批判』にいたるマルクスの基礎理論的研究がミルの思想に對する論理的体系的克服の過程でもあつたとすれば、このようなイギリス研究はミルの思想体系のイデオロギー的性格とその現實的役割とに對する正確な評價を可能ならしめものであつたとも見られるであらう。この点に關して特に注目すべきは、「工場監督官年報」が「つたえるところのイギリス資本主義のめざましい發展下における労働者の状態や十時間運動等」にあらわれた労働運動の具体的な諸相に對して示しているマルクスの深い關心であつて、イギリスの労働者には「自分自身の地位に對するはつきりした自覺、數の上でのその大きな優越、過去における困難な斗争の經驗、現在における精神的な力」がある点で他國には見られない進歩的性格があると同時に、他面「世界の工場」としてのイギリスの國際的地位から必然的に労働貴族が發生して労働運動全体にブルジョアの改良主義が浸透する傾向も亦存する事¹⁰がきらかに指摘されているのである。このよ
うなイギリス労働者階級の二面性が正確に把握された上ではじめてかの第一インターナショナルの創立宣言もか
れ得たのであり、ミルの労働者觀の意義と限界も正當に評價され得たのであつた。¹¹

第三に五〇年代のマルクスにとつて特徴的なことは、アジアの問題に對する強い關心であつて、彼は太平天國の

乱およびインド土民兵の叛兵を世界市場の形成による旧東洋社會の崩壞の結果としてとらえ、それがヨーロッパに及ぼすべき重要な反作用を注目した。従來は西歐の思想家にとつて停滯と野蠻の代名詞としてのみ考えられてきたアジアの民衆が、かえつてヨーロッパの反動と安定とをうちやぶるべき革命的主体として世界史の舞台に登場してきたといふ事實が、世界史の眞實の認識主体としてのプロレタリアートの立場に立つマルクスによつてとりあげられ、先進支配國の勞働運動と後進從屬國の獨立運動との關連という見地から分析されているのであつて、このようなマルクスのアジア研究は、當時の往復書簡や『批判』の準備的草稿の一部たる『資本制生産に先行する諸形態』が示しているような歴史的研究によつてうらづけられながら、『批判』の序文におけるアジア的生產様式という範疇を生み出すにいたるのである。¹²⁾これに對して父ミル以來多年東印度會社に勤務して來たミルも亦アジアに對して強い關心をもつていたし、それは、理論的には『原理』の第二篇分配論にみられるような從來の古典派理論の自己反省（たとえば第四章「競争と慣習」）としてあらわれ、政策的には、ウェイクフィールド流の後進國開發計畫論に示されているのであるが、¹⁴⁾しかしそれはイギリス的經濟体制を新しい歴史の段階においていかに改良し維持してゆくべきかという立場に立つての所論であつて、マルクスの問題意識とは根本的に異なるわけであり、¹⁵⁾この点は兩者の思想体系の本質につながるものとして重要な意義をもつ。ミルのヒューマニズムが『自由論』にみられるような品格の高さにもかかわらず、結局は西歐市民社會の立場を脱しえないという限界をもつのに對して、『批判』の序言にみられるかの唯物史觀の公式——それは一部のマルクス研究家によつて初期のマルクスのもつていたヒューマニズムを失つたものとして貶價されるのだが——の淡々たる客觀的敘述がかえつて『市民社會』の立場を止揚して「人間社會または社會的人間」の立場に立とうとするヨリ高きヒューマニズムに支えられていることをわれわれは見おとす

べきではないであらう。

- (1) 研究所版『カール・マルクス年譜』によれば、マルクスは五〇年九月にミルの『原理』をよんでいる（廣島譯一三八頁）。また五一年一月二十七日付のマルクスのエンゲルス宛の手紙にマルクスの友人ビーベルがつぎのように書いてある「マルクスはすじかり引寄せられている。彼の唯一の友人はジョン・ステュアート・ミル、ロイドだ」(GA. III. Bd. I. S. 133)
- (2) Marx: *Zur Kritik der politischen Ökonomie, Besorgt vom M.-E.-L.-Institut*, S. 86. 選集補巻② | 〇三頁。
- (3) 後年マルクスは六九年四月一九日付のエンゲルス宛の手紙でキリスト教社会主義者であるリヒターへの事につれ、彼は「ミルがすべてを塗りつくした今日では既に幾分外的な偉大なリカーヤ崇拜者である」とのべている (GA. III. Bd. IV. S. 183) が、世論に反してリカードの偉大さを解明しそれを正當に評價することも『批判』の一つの意圖であった。

(4) Marx: *Kritik*, SS. 219—231. 譯二六〇—二七三頁。なお『資本論』第三卷第五十一章「分配諸關係と生産諸關係」を参照。

(5) 選集②二四四—五頁。ミルの生産分配峻別論も、單に兩法則の論理的な性質のちがいを強調するだけでなく、「生産の増加の未だ重要なるは、未開國においてのみ。最も進歩したる國々においては、より良き分配こそ、經濟上必要なるものである」とする (Mill: *Principles*, P. 749. 譯④九三頁) 分配重價論につらなるものである。

(6) 「中國とヨーロッパにおける革命」(五三年) 選集③ | 〇頁。

(7) 「バーマストン内閣論」(五五年) 選集⑥四二頁。

(8) この点については杉原「マルクス剩餘價值論に關する一考察」(關西大學「經濟論集」第二卷第三号) 参照。

(9) これは五四年三月チャーティスト達の「労働議會」への手紙の一節である (選集⑥三〇八頁)。

(10) アーネスト・ジョンズの右傾に關するマルクス・エンゲルスの往復書簡 (選集⑥四八七—四九一頁) 参照。

(11) 『創立宣言』『資本論』における窮乏化法則の確認と十時間運動の重要視とを、ミルにおけるそれらの否認乃至輕視と比較せよ。ヨーロッパの國々の労働者の暮しむきには、多くの改善の痕こそあれ、苟しくも信を置けに足るような悪化の徴

候は一つもない」(『社會主義論』譯七四頁)。「ミル氏が勞賃の引上げの一般的方法を枚擧するに際して工場立法、勞働組合及びこの兩者によつて追求されている勞働時間の短縮に一言も費さないのは不思議である」(『反駁』譯全集(6)一五〇頁)。

(12) この点については石母田正「世界史成立の前提」(『歴史と民族の發見』所收)參照。

(13) それは「原理」に引用されているジョーンズの『分配論』やメーンの『古代法』などの立場に通ずるものであるが、彼らの東洋社會論の意義と限界については、島恭彦「東洋社會と西歐思想」第二―三章參照。

(14) ミルの植民政策論特にそれと判潤率低下の法則との關連については、黒田謙一「植民經濟論」第七章參照。

(15) この相違は六〇年代における兩者のアイランド問題のとりあげ方にもあらわれている(ミル『自傳』譯三三二―三四一頁。選集(8)五一―五三六頁參照)。

(16) フォイエルバッハに關するテーゼの十(G.A.I. Bd. 5, S. 335. 選集(1)八頁)參照。

四

五七年の最初の世界恐慌以後反動的停滯を脱しはじめた客觀情勢は六〇年代に入つて新しい段階に入り、ミルもマルクスも共に活潑な多面的行動を再開する。前者は下からのラディカルな變革をおさえるために旧体制の支配力をより精密・高級なものに改良せんとするイギリス産業資本の優秀な思想的選手として。後者はプロレタリアートの國際的組織を通じイギリスを據点として社會主義的世界革命を準備する勞働運動の中核的指導者として。兩者がそれぞれに代表する勢力は、アメリカの奴隸解放戦争やイギリスの選舉法改正やに對しては協調する側面をもちながらも、第一インターナショナルがマルクスの方向に發展してゆくに従つて漸次對立の側面をあらわにするのであつて、六七年の選舉法の改正を契機としてイギリス勞働階級の指導者たちの第一インターに對する態度は消極的と

なり、普佛戦争に對してはなお共同歩調をとりえた兩勢力も、パリ・コンミューンに對する態度ではついに決定的に對立し、かのオツジャーはもとよりエツカリウスでさえもマルクスと袂をわかつていた。マルクスがそれによつて「世界的に重要な一つのあたらしい出發点がえられた」としたところのこの事件は、ミルをして「勞働者階級の自然の渴望に合法的な満足にあたえるという目的」をもつた社會問題研究の重要性を痛感せしめるのであつて、パリ・コンミューンはこの二つの社會主義の本質を照明するにも役立つたといひうるであらう。マルクスはこのような二つの社會主義の對決という問題意識のもとに第一節でのべられた『資本論』第一版（六七年）『反駁』（六九年）『資本論』第二版（七三年）等におけるミル批判をおこなつたということ、そして、その場合の批判の基本的観点を第二節および第三節でたどられたような彼の思想の發展過程を通じて確立して行つたということ、本稿はこれらの点を明らかにしようとしたのである。

（昭和二十八年一月十三日）

- (1) 「ジョン・ステュアート・ミル氏は、吾々の宣言（選集①二六七―七三頁参照——引用者）に非常な賛辭を呈してくれだ。あの宣言は、とにかく、ロンドンには大なる効果をもたらした。就中コブデンの平和協會が、その普及を文書で申出た」（七〇年八月八日付のマルクスのエンゲルス宛手紙。GA. III. Bd. 4. S. 359）。
- (2) マルクスの七一年四月十七日付のクーゲルマン宛の手紙（選集①二九八頁）。
- (3) Elliot (ed.) : *Letters of John Stuart Mill*, Vol. II, p. 320.

附記 本稿は昭和二十七年十一月十五日京都大學經濟學會大會における私の報告の草稿をとりまとめたものである。